

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

——レトワルとその『日記』——

高橋 薫

*

時には賢明となるにしても、多くの場合無定見・無定形な民衆に、一定の流れを与えようとするひとつの方法が〈噂〉の操作であった¹¹⁾。既に触れたことでもあるが、ひとが〈噂〉を広める時、どのような目的意識が潜んでいたか、『日記』の中から具体的な事例を今少し拾ってみる。

(引用—12) [VI. 93; VII. 57]

(A) 《この日 [1593年10月1日], ヌムール公夫人は、生まれてこの方、沢山の悲しみを味合ったが、彼女の息子 [=ヌムール公] の [リヨンでの] 捕囚程胸を痛めたものは一度もなかったと大声で言い、捕囚をリヨン殿 [=リヨン大司教デピナク] の所為にしては、マイエヌ公の前で彼についての千もの非難を浴びせ脅迫し、(謂わば) 獅子の前で犬を叩き、胸の内にあるものをそれ以上吐くことはなかった。息子であるマイエヌ公が行かなければ、リヨンに赴くとして振舞い仕度をしたが、マイエヌ公は自分がその地に行くと、至る所に噂を広めた》

(B) 《二日後 [1596年4月23日], パリで、[オーストリア枢機卿 [=アルベルト] に奪われた] カレーの、次いで城砦の再奪取の噂が撒かれた。城砦の中には三百名の援軍が入ったと言われた。この偽の噂は、戦っている民衆を

安堵させる為に大法官殿 [= シュヴェルニ] がはっきりと許可したものである》

マイエヌ公は喧しい母親を宥める為、リヨン遠征に出発する振りを幾度もしてみせねばならなかった。そして、これは『日記』に明確には著されていないが、攻囲され疲労するパリ市民に戦意の持続を求める意図も、力づくで搦伏せた十六区総代会の動きを牽制する動機もあっただろう〔特に後者に関しては（引用—12）(A)の直前でそのようにとれる記載を留める〕。亦反復して噂を流すことで時間を稼ぎ、リヨンの王党派への帰順なる事態を何時の間にか日常化し、人々に慣れさせてしまうことも出来たろう。〈噂〉の流し方が重要な政策であるのは、フランス平定に手間取るアンリ四世にとっても同様だった。要地カレーが敵の手に落ちたと広まれば民衆の国王への信望が失せるのは眼に見えている。仮令長期に及んで通用する手段でないとしても、情報を混乱させる間に〈異常〉の衝撃度は若干でも弱められるかも知れない。政治的指導者の政策のみならず、個人が悪い評判を抑え己れ（の一族）を正統化する目的でも〔（引用—6）参照〕、或は対立する新教指導者達が死の直前にカトリックに改宗したと信じ込ませたイエズス会士達の如く〔VII. 109〕、宗教団体の勢力を殺ぐ目的でも〈噂〉は作られた。

併し〈噂〉が作られるのは、人々が一時にせよそれを信じ、一定の効果があったからであろう。作られたものであろうと自然発生的な〈噂〉であろうと、それは日常生活の中で多くの場合明白な効果をあげ得た。デペルノン公はリーグ派の人為的な〈噂〉の的となってパリの民衆に憎悪されたし〔III. 124〕、リーグ戦争の只中、アンリ四世がグルネに砦を建造中と耳にしたレトワルは、《パリの噂は嘘偽りだ》〔I. 33〕と知っていたにも不拘、当時の深刻な飢餓状態に影響されてか、食料不足を予想し小麦を買い集めてしまう〔V. 179〕。マイエヌ公の勢力で一度は弱体化した十六区総代会が再建されるとの〈噂〉や、外国の駐屯部隊が市民の屋敷を宿舍とするだろうとの〈噂〉は幾人もの人々をパリから去らせるには充分な原因となった〔共に VI. 123〕。民衆にとって次の

様な〈噂〉の効果は絶大であった。

(引用—13) [VIII. 223]

《[1606年6月] 29日木曜、パリで、この町が翌日の晩に崩壊するという噂が流れた。教皇がその啓示を受けたのだと言われ、その他の下らぬ話を民衆に喰わせた。併し民衆に対しこの駄弁はかくも多くの信用を集め、沢山の最も素朴で信じ易い者達が都市や場末町を去ったのである》

時にはこうした〈噂〉の効果を知る者は、己れに向けられた〈噂〉に対抗し、或はその効果をずらせ〈噂〉自体を有耶無耶にしてしまう為に、新たな〈噂〉を捏造せねばならなかった。

(引用—14) [VIII. 289]

《[1607年4月] 9日月曜、パリで、王妃 [=マリー・ド・メディシス] が(彼女は気分を悪くさえしなかったのだけれど) フォンテーヌブローで男子を出産し、オルレアン公の爵位を与えられたとの偽の噂が流れた。このニュースは意図的に、国王の身体に企てられた襲撃についての噂を(人々がそう言っている如く) 覆い隠す為に広められたものである》

自白をしないアンリ四世暗殺犯ラヴァイヤックを責める可く、地方に棲む彼の肉親をパリ迄連行すると、法廷が故意に〈噂〉をラヴァイヤックに聞かせるケースもあれば [X. 230]、より些細な事柄で、珍しい書物がパリで売られているとの情報が愛書家のレトワルをして書店を歩き回らせるケースもあった [IX. 310]。要するに〈噂〉は一定の現実的基盤、心的基盤があれば容易に信じられたし、〈噂〉を流すのは、従って、決して効果がないどころの話ではなかった。併し〈噂〉は確かめられもしないで、何故信じられるのか。〈噂〉が全て《偽》であれば誰も信じはしない。人為的な《偽の噂》ではなく自然発生的なもの、或は何等かの事実の報告を核とするものの場合、民衆の心性に受容

され、そして結果的に事実であると判明することがあるからだ。

《パリの噂》を《嘘偽り》と断じたレトワルはその他にも幾度か〈噂というもの〉について限定を与えようとした。

(引用—15) [IX. 174; X. 59-60]

(A) 《この頃 [1608年11月]、英国人モーガンが捕われバステューユの牢に入れられたが、幾夜にも亘ってドン・ペドロと連絡をとり、スペインの大使達や大司教と共にその家で開かれた会談に加わったのが露見した為である。噂では彼は陛下と話す許しを得、スペインの大秘密、就中スペイン王女とフランス王太子の結婚協定の提案は、フランドルでの和議もしくは休戦を陛下に結ばせる為の口実にして時間潰し、亦スペインがそれにより首尾よく計画を達成する為の策略に過ぎないと明かしたとのことだ。これら全ては正しく噂であり、即ち普通の人間には不可解な謎である》

(B) 《この月 [1609年10月] の末、パリに（そこにはその噂はずっと以前からあったのだ）、マイエンヌ公の子息、ナポリで亡くなったソムリーヴ伯の死去の確実なニュースがもたらされた。ある者はその土地の病氣 [=所謂ナポリ病 (?)] の所以と、別の者は、自分達の党派を捨て国王の党派に加わった伯の父への憎しみ故スペイン人が彼に与えた毒の所以だと言った。

《この間に、ジャンン議長に印璽を与える為にそれを取り上げようとしていると言われる当の大法官殿 [=ブリュール] の失寵がパリで話題になった。パリでは外の事柄は語られなかったがフォンテーヌブローと宮廷ではそうではなく、そこではそれに関して何事も大層内密に且つ耳許でなくしては告げられなかった。

《こうした噂が（上記の噂について沢山の者がそう見做している様に）応々偽りであるにも不拘、吾がフランスでは、人々はいつもそれらの噂を、大法官達の運命の先触れであり不吉な予兆であるとして注意して来たが、それは特に彼等が、善いことの為であれ悪いことの為であれ、民衆から憎まれ恨

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

まれていた時はそうなのだ。当の大法官は悪いことの為に皆から嫌われていたのであるけれど》

『日記』の中で〈噂〉を通じての大法官と民衆の関係が考察されるのはここ許りではない。1596年1月に生じた、時の大法官シュヴェルニ逮捕の《偽の噂》に関しても、レトワルはその〈噂〉が信じられた理由に、上記の引用と全く類似する根拠をあげている。くどくなるがひとつ問題点があるので敢えてこの箇所も援用しておき度い。

(引用—16) [VII. 44]

《6日土曜、公現祭、大法官殿逮捕の噂がパリに起こった。その噂は、全くの偽りとは言え、多くの者の間では真実として語られたが、それは嘘つき達が与えた保証故、亦この者が民衆からかなり恨まれているので、人々がかくあるように願っていた為でもある》

民衆の間に〈噂〉を信じ度いとの意識的・無意識的な願望があれば、〈噂〉が如何に《偽り》であろうと〈事実〉の先触れと考えられる。ただそれに加え、〈噂〉を広める《嘘つき達》が与える確実性の保証にも言及されている。私達の印象では、このレトワルの言及は〈噂〉を成立させる根拠の分析として傾聴すべき類であると思える。

〈噂〉が事実であるか虚偽であるかの判断を、レトワルはどのように下していたのか。ひとつに好奇心豊かなレトワルは〈噂〉の確認の為——と言うより物見高さ故か——〈噂〉の核を生じさせた〈事実〉の現場に赴くことがあった。

(引用—17) [V. 93]

《〔1591年〕4月29日月曜、パリのサン＝バルテルミー教会で、ある司祭がミサを歌っていた時、祭壇が覆われている布の上に幾つかの十字架が現われたのが認められた。午後になると、こうした十字架が様々な場所と教会、サン

＝バルテルミー教会にさえ出現したと、至る所で広まった噂に基き、私は、
好奇心に駆られて、他の人々と同様、その神秘を見て感想を述べようと、そこに出掛けた。そこに到着すると、教会関係者が一人いて、接吻するよう厚い布地のハンカチーフを差出していた。その上に十字架があるとのことだが、私には如何なる痕跡も気配も見えなかった。接吻した数多くの民衆の所以で消されたのかも知れなかった。私は接吻しなかったが、それはそうする迄もなく、問題のハンカチーフの上に、私のハンカチーフの上にある以外の何者も認めなかったことだけで満足した為である》

一応は慎重に《神秘》の真偽に関しては口を閉ざすレトワルだが、ともあれここには己れ自身の眼で事実を確認しようとする近代的・実証的な人物の姿が浮かび上がる。周囲がどれ程主張しても、認識し判断を下すのは〈私〉である。〈私〉の判断、〈私〉の意見は、少なくとも〈私〉にとっては充全の価値を持つ——但しそれを十六区総代会の指導するパリ市中で公言す可きか否かは別の話である。だがそうした態度と並んで、事実に対する体験や見聞なしに、〈噂〉となっている事柄をレトワルが〈真実〉と見做す場合もある。信頼出来る人物からもたらされた情報である。

1610年7月22日、イエズス会士ゴンチエ神父はその説教にあたって、日頃の過激な反新教徒的言辭を穏かなものにした。

(引用—18) [X. 345-46]

《語られるところではマイエンヌ公がこのイエズス会士の良い向きへの変化（併し乍ら特にイエズス会士に関してはめったに起こらない逆転だけれども）の部分的な原因で、彼等の教団の何人かの大胆な鉄面皮を大変辛辣な言葉で厳しく叱り罰したのだ。それらの者は、善きカトリック教徒が、公の家の王侯と共に、彼等とカトリックの信仰を守る為、異端者達の武器と陰謀とに対抗して来たが、今や公が異端者共を支援しており、公やその家の方々以上に異端者の良き友にして保護者はいないとの不満を説き、聞かせる為に公

の許に遣わされた代表であった。これをマイエヌ殿は非常に不快に受けとり、彼等自身が宗教と国家との破壊者であり、偽善者にして陰謀家であると呼び、彼等の陰謀とけしからぬ説教を続行するなら、罰を加えるとの脅迫と共に、彼等を送り返した。流れている噂を私は殆ど信用するものではないが、けれども上記の事柄を真実と思うのは、マイエヌ殿の士官の一人、誠実で真理を愛する男の口から聞いたからである》

かつて簡単に触れた点であるが¹²⁾、十六世紀の歴史家達は〈真性〉の欲求に取り憑かれており、民間伝承的な怪異譚等の記述は努めて避けるようにしていたが、ただ、例えばドービニエの史書を参照すると、信頼するに足る人物の証言があれば、不思議譚を弁明し乍らも記録することがあった。ドービニエという幻想詩人には殊にそうした驚異を受容する心的基盤が存したのだろうが、それだけでなくこの時代の有する、〈真〉の構造を巡る特性が働いていたとも想える。即ち、言葉遊びの非難を覚悟して言えば、〈真〉とは〈信〉なのだ¹³⁾。〈真〉が無矛盾性を指すとか、日常生活を超越したイデア的存在を指すとかの思想は、勿論当時の平均的な知性からすれば縁の無い事柄であり、宗教的な〈真〉を別にすれば——それすらもひとつには宗教は最終的に〈信〉に帰着し、ひとつには教義に耳を傾ける人々の〈信〉の念に関わる点で「別にすれば」とは言えないのかも知れない——〈真〉は現世の否定やデカルト的懐疑を経て獲得されるのではなく、この世間を共有する人々の視線の高さに置かれるものであった。ドービニエやレトワルは様々な弁明を加え乍らも、情報の提供者が誠実か否か、正直か否かを、直接見聞しない事実、有り得そうもない出来事を〈真〉と認定する最終的な判断基準にした。(引用—16)での様に、《嘘つき達》の保証故に、根も葉もない事柄が〈真実〉として通用してしまいう過程を難じたとしても、レトワル自身が〈真〉を判断するそうした過程に身を任せた以上、《嘘つき達》に〈信〉を預けて〈噂〉を伝達する人々を咎め立て出来る視点は、第三者的に言えбайいと言って宜かった。問われるのは〈信〉を置いた人間の誠実さであり、更に考えればレトワルが一定の党派に対し〈不信〉の人であっ

たから、結果的に非難し得ただけとも想える。

〈噂〉がそのように〈噂〉を送る側の保証と受け取る側の希望とに基いているなら、同じひとつの〈事実〉から、或は同じひとつの報告から発生しても、広まる〈噂〉が複数であったり甚しい差異があったりする可能性も小さくない。リーグ戦争の渦中、アンリ四世軍に包囲されたパリ市内と、アンリが陣を構えるサン＝ドゥニとでは、相互に正反対の〈噂〉が流れたことがあった。

(引用—19) [V. 169]

《この日 [1592年 5月 7日] からこの月の16日土曜、聖霊降誕祭の前日迄、パリの噂は和議から戦争へと変化し、専ら戦闘についてのものであったが、パリではマイエヌ公とスペイン兵による勝利の、サン＝ドゥニでは国王による勝利の戦闘であった》

〈事実〉と逆の内容が〈噂〉となり広まるのも稀とは言えない。

(引用—20) [VI. 120]

《その同じ日、即ち [1593年] 12月29日水曜、[パリ知事] ブラン氏がル・メートル議長を家に訪ね、たっぷり二時間費した。直ちに街に、氏が議長に持って行ったのは「追放の」書状だとの噂が広まった。併しそれは全く逆で、彼に絶対に去らぬよう頼む為であり、と言うのもこの善人は、暇を告げられる前に自分から取ろうと決心していたからだ》

或は亦、〈噂〉は同一の事件を素材に同一の場に広まるものであっても、時間の経過と共に変化することがあった。

(引用—21) [VI. 214]

《[1594年 5月] 21日火曜、ヴィトリール＝フランソワ [フランセ] の町がリーグ派に叛き、王党派に加わり、ギーズ公がその町で虜囚となったとの、偽

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

の噂がパリに流された。翌日、その町が焼かれ、ギーズ殿は城砦に逃げ込んだと人々は話していた。二日後、町は相変わらず燃えていたが、ギーズ公はもうその場所にはいなくなっていた。この月の27日、全ては何事もなくなった》

〈噂〉は刻々変化し、あたかも生長し消滅するが如くである。〈噂〉は一定の寿命を持つ。〈噂〉が伝播する速度と人々がそれに興味を覚えている持続期間とが〈噂〉の寿命を決定する。その持続期間は〈事実〉が露わにならぬ度合と、人々が〈噂〉の内容に期待する度合に応じ区切られる。つまり事実が確認され得る〈噂〉は、それが真であろうと偽であろうと、〈噂〉を伝える人々が確認した時点で終りを遂げる。真性が伝達者によって保証されるにせよ〈噂〉が〈噂〉たり得るのは、伝達者の連鎖の中に〈噂〉の〈事実〉に関し確認し得ない人間がいるからである。〈虚偽〉と判明した〈噂〉には何も残らないし、一方〈真実〉と万人が確認した〈噂〉で残るのはせいぜい昔語りである。例えば以下の二日間の〈噂〉の変化は虚偽性を曝露された〈噂〉の運命を教える。

(引用—22) [V. 181]

《[1592年] 10月12日月曜、公表される筈の取引の代りに、リーグ派市民(大変疲れ始め、カトリック教徒に改宗するよう国王に諭す使者を送る手段を考える可く集まっていた)は、この日一瞬の裡にパリでひどく大きく生じた、ベアルヌ野郎が捕えられたとの偽の噂で気晴しをさせられた。その噂は十六区総代会のニュース屋や説教師達によって甚だ巧みに装われ主張されたので、この日ベアルヌ野郎が囚人としてパリに連行されると確信し、待ち構える莫大な群集が中央市場に見受けられた。そこには幾名かの単純な信心深い女さえおり、朝から国王を見る迄は飲みも喰いもしないと誓い、星が出る迄断食した。

《翌日、火曜、その件については最早話題とならず、[国王側の] グルネの砦に関してであった。マイエヌ公が砦を奪い壊し、スイス兵を破り、その

流された血は尻迄あったと言うのである》

(引用—21)の〈噂〉は内容を徐々にずらし乍ら一週間継続し、(引用—22)のそれは一日で終わった。〈噂〉の期間について、それを決定する要因の複雑さにも不拘、人々は経験からある程度の目安を持っていたらしい。

(引用—23) [VI. 223-24]

《〔1594年8月〕25日木曜、パリにコンティ侯とソワソン伯が到着した。同じ日、パリで、エルネスト公によるマイエヌ公虜囚の偽の噂が起きた。その噂は、偽りのニュースの習いに反し、十分二週間続いた。と言うのも虚偽が二十四時間充分維持されればそれだけで大したことであり、国家の問題に関連するとそうした虚偽は応々大層役立つと言われているからである。併し今回のものは丸二週間続いた》

〈噂〉の時間的側面で補っておくと、〈噂〉を伝達する人々の願望故、或は人為的な理由により、〈噂〉が反復されるのは時折あった。(引用—5)での戦争と和議の〈噂〉は同型のパターンを描いてリーグ戦争期、殊に国王軍の強力な包囲陣の中でパリの民衆が飢餓と疲弊の度を強めて行く段階で、幾度も繰り返された。人々は外部との交通を可能にし自分達の困窮の解放となる和議の、些細な糸口と思える徴にも飛び付き、実現されないのを見るや失望し戦争の〈噂〉に走った。(引用—12) (A)で狂乱の母親の非難を宥める為、或はより政治的な動機でか、王党派の手に落ちたリヨンを奪回す可くかの地に遠征すると〈噂〉を流したマイエヌ公は、その後三ヶ月の間に何度も出発の〈噂〉を立て続けた。イエズス会士達により新教指導者テオドール・ド・ベーズは幾度死亡させられたか判らないし、幾度カトリックに改宗させられたか判らなかった。ただそのように反復される〈噂〉が常に当初の効果を維持するとは必ずしも言えない。民衆は〈噂〉を追い、〈噂〉に押されパリ市内を駆け巡ったが、やがて〈噂〉に対し自覚的な防御の姿勢を呈する場合もある。

(引用—24) [X. 327-28]

《[1610年7月16日] このような駄弁でこのノート [=『日記』] を膨らせようと私が望んだのは、幾人かの国家的陰謀家、国家の休らぎの確信犯的な敵対者によって蒔かれ広められた、来たる可きもうひとつの聖バルテルミー [の虐殺] に関する至る所で流れている噂故である。それらの陰謀家はかかる人為的操作を通じ民衆を虐殺に走らせようとしたのだが、民衆の方は、こうした全てにも不拘、過去の様々な例で賢くなり、餌に喰いつこうとはしなかった。「我々は貴族の諍いには関心がない(と民衆は言う)。そう欲したり出来たりするなら、望むがままに和解するが宜い。だが我々を巻き込んでくれるな。我々はそうした人間が敵をどう扱うか知り過ぎている。我々はその為に犬も猫も馬も食べたのだし、どんな代価を貰ってもその状態に戻る気はない。それらの肉を美味と思う者は、存分に食すが宜い。我々としては、それらを飽きる程喰らったから、もう味合い度いとこの想いを失なってしまった」。かかるものが民衆全体の声であり、パリのあらゆる市場や広場での、人足や女達皆の一致した言葉だった》

苦い経験によって民衆も亦、〈噂〉の力学に関し何事かを学んだのであろうか。併しレトワル自身がそうである様に、〈噂〉というものに懐疑的な姿勢を持つとしても¹⁴⁾、それが〈噂〉に踊らされぬ保証とはならない。(引用—24)の言葉の後にもレトワルは『日記』に幾度もパリやその他の地を流れる〈噂〉と、それに動揺する民衆の姿を書き留めねばならなかった。

*

『日記』が写した無数の〈噂〉は、その中を流れる三十五年の歳月に応じ、或は同型の反復とも見え乍ら、他方では明確にそれと知れる性格の変化を示してもいる。つまり1600年代初期を境にそれ迄は主として殆どが国家的規模の事件や人物、或はそれ(彼)等を左右し得る宗教的指導者を〈噂〉が素材として

来たのに対し、次第に市井の出来事や市民階層を言挙げする類が含まれるようになる。必ずしも高名でない官僚の批判的な〈噂〉〔VIII. 64〕、香水商の財政状態の臆測〔IX. 140〕、更にはレトワル自身の子供の事故死の報〔VIII. 237〕もある。かつての如く貴族間の愛情関係の綻れのみならず、身持ちの悪い妻を持つ市民もが〈噂〉の種として扱われる〔IX. 173〕。珍しい書物を巡っても教養人や愛書家の間で〈噂〉は口から口へと伝えられ〔IX. 131〕、魔術師達の行った逆ミサはパリ市民の格好の話柄となる〔IX. 134〕。とは言い条、殊にアンリ四世暗殺後、『日記』の中の〈噂〉は急激に国家レベルの事柄を中心とし始める。多分パリを流れる〈噂〉は現実史の上での政局や社会の不安や安定をある角度で反射している。政治的・社会的に共同体の基盤が不安定な時期には、政治や戦争の動きのひとつひとつが民衆の日常の只中に生じ直接的な影響を及ぼす点を考えれば、民衆が政治的・社会的上層の行動に関心を寄せるのは当然であろう。更にこれとは逆に、人為的に〈噂〉を作り出す者達は情報を混乱させることで共同体を動揺させようと企画していたことも考えに加えなければならない。併し共同体にとって〈噂〉はどのような機能を果たすものなのか。

〈噂〉はその発生の経緯が如何なるものにしる、〈噂〉を現に伝達しつつある一定の共同体に対しある〈超越性〉を指示する。つまりそれがパリの外部にいるアンリ四世の消息に関わろうと、パリの内部に棲む、共同体の成員が顔見知りの人間に関わろうと、それらに与かる事柄が〈噂〉となった時点で、その人物や出来事を、〈噂〉を伝達する集団の外部に祭り上げてしまう。そしてその〈外部〉に対し、伝達する集団を共同体とする。それは、〈噂〉の発生が非実体的であり、実見聞が不可能な事象に由来する故でもあるが、〈噂〉が〈異常〉だからでもある。ヴィルロワの祖父が漁師だったとの〈噂〉（繰り返すが彼の祖父が事実漁師であったか否かは〈噂〉の伝達過程では系譜学的に確認を要する事項ではない）は、社会的な役割としてはヴィルロワを貶めるが、本来的に世襲であって欲しい貴族の世界に、血筋の正統性以外の条件で台頭した高級官僚を〈異常〉と把える視線に根拠を有している。法服貴族集団の形成は既に十分な過去を負っていたけれど、売官制度の腐敗等も原因して、全階層から

正統的であると信じられていた訳ではなかった。〈噂〉が〈噂〉としての伝達力を獲得するには〈本来的なもの〉、〈日常的なもの〉、〈恒常的なもの〉からのある逸脱が存在しなければならない。そうした〈逸脱〉や〈異常〉が、〈噂〉の起点に認められる事象を、共同体の外部に押しやる強制力となる。

だが一方で〈噂〉は、問題の人物や出来事を位相的な外部に据えたまま、その〈外部〉に共同体の内部に絡む一定の役割を与え、位相的な〈外部〉もろとも共同体化しようともする。アンリ四世の活動はパリの外部を場とし、包囲されたパリの内部にとどまる民衆の知り得ない地点でのものだが、にも不拘それはパリの命運に深く関連する。事実史の上でも無論そう言えるけれど、〈噂〉が問題とするのは、そうした事実とは別の位相に属する、即ち共同的なイメージの作るある種の〈神話〉とその共同体との関わりなのだ。こうした関わりはより間接的な場合もある。シャルル九世の衣裳部屋係ゴンディが、王の死後その権益を奪われ、それを憂いて死んだとの〈噂〉に於いて [I. 8]、〈噂〉を伝達する集団が民衆のレベル迄下降しているなら、その時にはゴンディと言う名の個人よりも社会的上層、貴族の間に発生した〈異常〉として、民衆の貴族世界像に組み込まれよう。伝達集団が上層に限られる時、ゴンディの地位により、ゴンディという〈外部〉は共同体の内部に、〈噂〉の層にくるまれて存在することになる。このようにして共同体は〈外部〉である〈噂〉の事象を、一度は己れに非ざるものとし乍らも、それに相対的な位置を付与する点で、より広いレベルで共同体化し、その為に問題の事象が伝達集団の外部にあり乍ら、その集団の成員と親密なイメージを結び始める。パリ内部の民衆の多くにとって、アンリ四世は悪魔的な存在である一方で、数ある〈噂〉の中心として、その周囲に〈内部〉を引き寄せ、〈内部〉の中央にある〈外部〉によって共同体の統一が保たれるという事態が生ずる。繰り返して述べて来た通り、〈噂〉は一定の党派や人間が、民衆の煽動を目的に流す場合もあるけれど、仮令その種の〈噂〉にせよ、それは反面、共同体が、その時点での共同体を成立させる為に、〈噂〉を必要とするとの謂でもあるのだ。流される〈噂〉が〈アンリ四世〉程の巨大な事象に関わらずとも、それは己れを伝達する民衆＝共同体を〈外部〉

に対して同じ側に並ばせる。伝達集団の構成員がリーグ派であろうとポリティック派であろうと、つまり〈噂〉の事象への価値判断は全く異なるろうと、〈噂〉を伝達する人間に関係する限り、それに向かう視線の角度は同じなのだ。もし異なる角度を所有する人間がいたとすれば、レトワルがそうであった如く、〈噂〉の本性や力学を知悉する者であったろう——知悉していても〈噂〉の渦中に置かれたいとは限らないのではあるけれども。

共同体が常に〈外部〉を必要とし、そのイメージである〈噂〉を必要とするにしても、どのような〈外部〉でも一様に〈噂〉の素材となる筈はなく、共同体がその内部的、或は対外的状況に応じ関心を抱き易いものが撰択される。勿論その最高位には共同体の存続を決する類の素材が挙げられよう。パリ市自体の崩壊の予言は〈噂〉を伝達する多数の民衆を巻き込み、彼等を市外へと誘い出した。即興的な戯言や説教を〈噂〉に転化するのには、共同体の、その時々的心灵的傾向である。バルナベ・ブリソン等を処刑した際、その行為を正当化し民衆を己れの側に立たせようとしたリーグ派の説教が見事な失敗に終わったのは[V. 126]、その説教を〈噂〉の核として聴き伝達する筈の民衆の内に、それを〈噂〉として成立させる反応が存在しなかったからに外ならない。

時代と共に共同体の内部的・対外的、或は物理的・關係的・心性的基盤は変化し、亦〈噂〉も変化する。戦時にあって困窮の為、ともすれば拡散しがちの共同体の意識を緊張させ、自意識を持たせるには強力な敵、〈外部〉が必要であったが、一度び和議が締結され、パリのみならずフランスからも反アンリ四世勢力がほぼ一掃されてしまうと、共同体は本来の、關係の網目に包まれた求心力を取り戻し、時折〈日常〉に対する〈異常〉を発見し〈外部〉として設定しつつ、共同体が共同体であると再確認すれば、それ以上の〈外部〉を求めずに済むようになる。アンリ四世が暗殺されると共同体の様々な位相で再び動揺が生じ、強力な〈外部〉を捜し始める。ただこの時期の〈外部〉は、リーグ戦争期のアンリ四世や、それ以前のアンリ三世治下での「民衆の敵」である寵臣達の様に、パリに棲む人々の大多数に明確な像を与えるものではなく、これらの人々のある部分が構成する下位共同体——例えば新教徒集団、イエズス会士

集団——の結束を強固にする程度の〈外部〉、或は国王の暗殺から派生した数多の非本来的な事件の連続で構成される。ナントの勅令以後十年余、レトワルの暗い描写にも不拘、一般には繁栄していたと言われるアンリ四世の治世¹⁵⁾の急激な切断は、人々に将来の不安を覚えさせ乍ら、ある程度安定した政治的・社会的基盤を遺産に残された所以もあって、強大な「敵」の神話というよりも、相対的に細かい渦を起こし、下位共同体間の均衡の再編成を目指させたようだ¹⁶⁾。(引用—24)で見たように、少なくともこの時点では大きな〈外部〉、大きな神話が、度重なる経験を積んだ民衆を動かしにくくなっていた為でもあるかも知れない。

併し『日記』の中の〈噂〉の変化は時代の変化だけに対応しているのだろうか。私達はそこに視点の変化も作用したとの印象を拭い去れない。私達が『日記』をレトワルにより規定された——「規定された」と言うのは、特にリーグ派統制下の時代の記述が、必ずしもその日付の時点で著されたのではなく、亦『日記』全体を通じてレトワルが項目に度々手を加えていたと、実証的に調査されているからだが——年代に従って通時的に読んで行くと、話柄の撰択と、それを記述する視点が徐々に、併し確実に変化するのがよく判る。

初期の『アンリ三世下の日記』では、記載される項目は先ず事件史であり、王侯の逸話であり、パンフレの類への言及や抜き書きであった。そこには書く主体としての〈私〉は凡そ登場しない¹⁷⁾。レトワル自身が言及される場合でも、それは事件の証人であるレトワル、或は事件を発生させるレトワル——レトワル自身がパンフレを作製、流通させる等——の姿に限られる。アンリ四世の時代となり、レトワルがノートを書き継いで行くにつれ、様相は異なって来る。先王の末期と同じくリーグ派がパリの実権を握り、相変らず事件史が項目の中心を占めるにしても、先ず〈私〉の出現度数が明らかに高くなる。一定以上の事件に関与する存在——既述の P. D. C. リストへの記載——としてだけでなく、飢餓に苦しむパリ攻囲戦の焦点での食料の心配や〔一例として V. 51〕、そうしたパリを出発する為の許可証発行を求めての奔走等の個人的な事件も書

高橋

き留められ [V. 49], そして更に肉親, 知人や縁者の運命にも筆が延びるようになる。当面の課題である〈噂〉とは関係しないが, レトワルの記述の変化を示す為, 後者の例をひとつ引用しておく。

(引用—25) [VI. 108]

《この月 [1593年11月] の6日月曜, 聖ニクラウスの日, 私の姪, マリー・ド・バイヨン嬢が, 二十歳前後であったが, パリ市内の, 法院判事レスカロピエ氏の家で死亡した。彼女はその家に, 彼女がかくも愛情を覚えていたある貴族の結婚を止めさせようと連れて行かれたのである。その貴族に会い話をする手段を発見した後, 二十四時間後に愛情が彼女に死を与えたのだ》

パリ・リーグが最期を迎えると, 『日記』の記事も事件史や逸話史の範囲を越えて行く。1603年頃から, レトワルは愛書家として, 話題となり入手した書物を挙げ, 或はそれらを収集する努力や状況をも物語り始める。『ローマ教皇ノ権力ニツイテ』(アレクサンドロス・カレリウス著, 1599年)を知人から捜すよう頼まれたレトワルは, その苦勞をこう話す。

(引用—26) [VIII. 118]

《[1604年2月16日] 彼 [=知人カゾボン] は, その本が稀書でド・トゥ議長の書齋でしか見たことがないので, それを見, 読む為, 私がそれを一部入手出来ないか, 私に頼んだ。そこで三四日も大学界限を彷徨した挙句, ようやく, 偶然一冊を発見した。四分の一エキュかかった。この本を読んで私が発見したのは, 真実それが教皇の権力を神と分割し, 殆ど等しいとし, 当代の邪なポリティック派や, 本書がポリティック派の枢機卿と見做したがついてるベラルミーニの見解や著書に対抗することである》

更に1606年, 表紙にモンテーニュの一節と, 彼への共感と彼の影響とを語る文章を載せたノートに移ってからは, 『日記』は遙かに〈私〉的となる¹⁸⁾。モン

テーニュとのやや遅れた出会いが突如レトワルに、〈私〉を伸び伸びと表明する自由を与えたかの様に¹⁹⁾、例えば書物を巡る記事に於いても、その書名を単に引く許りでなく、時には簡単な、時には長文の引用も含む読書録の観を呈する。そこに認められるのは事件史よりも、事件に触発された時代への批判であり慨嘆であり、或はレトワルを襲う病苦〔VIII. 290〕や訴訟〔X. 162〕の報告であり、やがて必ず彼を招く死についての瞑想である〔X. 104〕。要するにレトワル最晩年の『日記』は〈私見〉の集成である。

(引用—27)〔XI. 24〕

《〔1610年〕11月2日、万霊祭、病が私を捕え家に止めおいてから、そして死者の数に加わると思ってから丁度二ヶ月後、未だ弱々しく、病が私に耐えさせた苦痛でひどくやつれてはいたが、私は住まいの外に出た。最初の訪問は善き隣人、アウグスチノ修道士達の許にであり、私はその場所で、誰もいない一隅に離れて引き下がり(私が度々することである)、私と私の家族の幸いの為に私の生命を必要と判断され(私がしなかったことである)、それを私に再度与えて下さった神を讃え、感謝した。悪しきキリスト者である病人のあらゆる望みはただ、より一層生き現世を娛しむ為に、回復することである。併し善きキリスト者の病人の望みは、生きる為ではなく、行いを改める為に、回復することである。私の心にその望みを刻み込まれた神は、恩寵により、私が絶えず祈っている様に、その善き願いの効果を私に下された》

『日記』はこのようにレトワルの眼に映じ、或は伝え聞いたパリやフランスの出来事の記述から、書物という客体化された他者の見解——他方それは愛書家たるレトワルの姿や性向も伝える——へ、そして記述する主体であるレトワル自身の行動や見解へと、時代の変化やレトワルの年令の変化に応じ、記事の内容を移行させて行く²⁰⁾。〈噂〉の存在基盤が共同体である為、それは『日記』での〈私〉の位置の変化に一般的には連動し難く、にも不拘、場合によっては〈噂〉を撰択する基準を通じ、その変化を窺うことが可能である。書物を巡る

言葉が多くなった頃、書物についての〈噂〉も時として書きとめられるようになる。

(引用—28) [VIII. 182]

《[1605年6月] 『サヴォワの騎士』, 『三本の紡錘竿』, 『従僕』といった、この書 [『円戯場』] と同じ素材, 国王と国家に敵対する同じ考え, 併し『円戯場』よりも明らさまでもっとはっきりと邪な——後者は陰にこもってそうなのだが(従ってより危険だとも言われる)——本がこの頃パリで噂 [=評判] になった。だがサヴォワやその他のスペイン王の土地で印刷されたので眼にとまることはなかった》

1606年頃からは僅かなりとも、レトワルと言う、官職を辞し数年になる一介の市民の周辺の〈噂〉を認めることが出来る。繰り返し触れたレトワルの息子が事故死したとの〈噂〉、或は間接的であるが、レトワルの書齋を見学に来た香水商の経済状態についての〈噂〉はその類である。レトワル周辺の人物や偶々出会った、多くは国家的規模ではない人々の〈噂〉が、国王や戦争に関する伝聞や、パリ中を巻き込む奇聞の間に混じるようになる。それが或は平穏な時代の〈噂〉と言えようか——即ち様々な〈私〉がすぐ近隣の他の〈私〉をあげつらい、あげつらう〈私〉も亦他の〈私〉の話の種になると言うことが。併しそれに平行して、公けの官僚たるを止め市井に降りたレトワルの関心が、時代の動きから時代の評価へ、殊に邪悪の指摘へ、公けの事柄から〈私〉の事柄へ移動しつつあったのも確かである。

時代は変わりレトワルも変わる。そうした変化の最後の例として、暗殺直前のアンリ四世の行動を引いておこう。周知の如く、レトワルのこの国王への愛着は有名で、リーグ派統制期のレトワルの忠誠や、アンリのパリ入城時の讃辞から、如何にレトワルがこの国王に期待を寄せていたか知ることが容易だ。併し共感に満ちたその像も時間が進むにつれ次第に色を失なってゆく。

(引用—29) [X. 318-319]

《[1610年6月]この頃、国王の死去の数日前、貧しい農婦への、人頭税に関する(執達吏は彼女から既にあらゆるものを取り立てており、最後に、彼女と六人の幼い子供達の食料としてゆいつ残されていた一頭の牝牛を売り払ったのだ)残酷で非人間的な執行が悲惨で驚く可き事故を起こした。この哀れな農婦が、絶望して、先ず六人の子供達を絞殺し、次いで自身首を括ったのである。

《かかる正しく悲劇的で怖ろしい振舞いについて国王への報告が為された。陛下の死の前日、この哀れむ可き者の兄が(全くの襤褸着の貧しい男だった)陛下の足許に身を投げ出して裁きを求めた。併し国王は聊かも心打たれ動かされるどころではなく、逆にこの哀れな男を手厳しくはねつけ拒絶して、彼に、お前達は皆ごろつきであり、首を吊ったのが一人でなく百人だったらよかったのだ、と言った。男は、この言葉の後、立ち上がり、天に眼を挙げこう語った。「国王が私の為に裁きをつけることを考慮して下さらないのだから、天にいられる王、神がきっと近々裁いて下さるだろう」。翌日、国王が殺された》

或はこうした時代の変化とレトワルの変化、その変化自体をレトワルは後世に伝えたかったのかも知れない。と言うよりむしろ、『日記』が私達の関心を把えて離さないのは、動乱の時代を生き存らえたパリの一市民の心情やその周囲の世界が、正しくその変貌の相の下——そしてその不変の相の下に描かれているからではないかと想われる。

*

〈噂〉が共同体を維持するに不可欠な要件である一方、個人の生活の重視や〈私見〉の表現は、それが共同体に属さずその当の個人のものである限り、その個人を共同体から切断するに十分な要件であった。丁度モンテーニュがかつ

てそうした様に、そして教養を有する法官の典型であるかの如く、レトワルは法院報告官の職を、リーグ戦争の余波が収まった1601年に辞し、己れの時間に満たされる筈の隠退生活に入った。併しその後の生活は必ずしもレトワルの欲した様には進まなかった。病は彼の身体を侵し、親類や知人に都合した金はレトワルの許に返却されず、為に彼は幾年にも及ぶ訴訟の山を越えざるを得ない。職を売却して得た金の価値は年々下がり、肉親にも増して愛情の対象である書籍は完全に購入出来るどころではなく、収集品を手放してその代価に充てることすらある。生命の危険に曝されて迄支持し続けたアンリ四世の治下は予想程には明るくなく、宮廷と民衆の距離は広がる一方となり、パリ・リーグ期以来の仇敵、イエズス会は王の近辺、王太子ルイの傍に迄勢力を伸ばしている。レトワルは現世への不快を語り乍らも、如何ともし難い怒りと無念の解決を必死に、堅固ではあるが決して他者への強制を伴わない信仰に求め、あたかも自らに納得させるかの如く、〈私〉的にその想いを『日記』に著した。人生の軌跡としてはモンテーニュに倣い乍ら、モンテーニュの没後リーグ戦争とアンリ四世時代を生き延び、現世に託した夢を断たれ、メランコリーの中に死を迎えねばならなかったピエール・ド・レトワル²¹⁾——その姿は私達の胸を打つ。

夢破れても尚、レトワルは死の直前迄『日記』のノートに向かい続けた。そして王太后マリー・ド・メディシスの政権下のパリの〈噂〉も亦、彼は倦まず拾い続けた。それが愚劣であると知りつつも、何故彼は〈噂〉を記載するのを止めなかったのか。ひとつに恐らく、既述した通りレトワルが〈情報〉収集のマニアであり、〈噂〉も含めた〈情報〉を拾い上げる悦びと習慣とが彼の裡に深く根差していたからではあるまいか。そして〈情報〉を媒介に人々の思考や感情——仮令〈情報〉が偽物であってもそれを伝達する人々の内面を窺うことが出来るし、世界に向けられたレトワルの好奇心の一部を、間接的乍ら満たすことが出来たろう。

それともレトワルは、〈噂〉が応々根も葉もなく、それを伝達する民衆の愚かさを重々承知していても、〈噂〉や〈民衆〉がパリの一部であり、否むしろパリそのものであると悟り、反撥を覚え乍ら他方で愛情を感じていたのである

うか。官職を辞した後、レトワルには幾度となくパリを離れる機会があったらうに、彼は決してパリを去ろうとはしなかった。経済的な、もしくは家庭的な理由があったかも知れないが、当時の〈引退した小貴族〉の理念とは異なる²²⁾、これはレトワルの姿であった。1570年、ボルドーの高等法院の職を譲り故郷の城館に隠棲、書齋や付近の田舎で好みのままの生活を送った、敬愛するモンテーニュとは逆に、レトワルは余生の場に、森や川、畑に囲まれた田園の屋敷を望んだ風はなかった。レトワルの書齋は喧騒に満ちた、パリの密集する街並の只中にあった。幼いルイ十三世のサン＝ジェルマン＝アン＝レの館での遊び友達である村の少年の《宮廷人の野心が空しく悪意あるのと同じ程度に無垢で、注目すべき田園の素朴さ》[X. 383]を評価するレトワルは、併し都市と田舎の対立という文明批判・時代批判のコードを越えて本心から即自的な〈田舎〉や〈田舎者〉と交際し得ただろうか。一方で《本物のパリ市民》を《即ち愚かで軽率な者》[IX. 124]と定義し乍ら、レトワルはパリの街が《思うに、太陽が眺める都市の中で最も美しい》[IX. 143]と断言するのを忘れない。《本物のパリ市民》として、欠点も美点もあるパリを彼は見捨てることが出来ず、ありのままのパリと己れの不可分を多分納得していた。そしてパリの街路を流れる〈噂〉も田園の細流以上にレトワルの耳を魅せないとは言えなかった。

——だがパリはレトワルに都市との一体感を本当に与えたのだろうか。別様に言うと、ペリゴールの一角がかつてモンテーニュを迎えた様に、レトワルに遊びの場を提供したのだろうか。隠退した小貴族達は、領地の城館で近隣の同好の士と雑談し、読書にふけり、回想を口述し、狩に出掛け、村人と親しむことを夢みていた。つまりそこにはフランスの豊かな自然の懐での、孤独と社交の生活が待つ筈だった。対して私達の眼に映るレトワルの晩年は人間関係の面でむしろ寂しい。彼が『日記』の中で肉親に余り筆を割かなかったのは指摘されている²³⁾。レトワルには書籍の収集という趣味を分かち、教養人の友や、ド・ベロワ〔註(9)参照〕の様に、理念を同じくし、同様にパリ・リーグに迫害された仲間がいた。けれども彼には街区に根を下ろした共同体の意識が薄かった。群集に湯浴みしても群集と交わりはしない。換言すれば街区の視線を想定し得

高橋

でもその熱狂を共有することは出来なかった。新教の思想に共感しつつも、そしてカトリック教徒の腐敗に憤りつつも、父祖以来の伝統に殉じようとした。要するにレトワルは都市を去るには都市を愛し過ぎており、都市の街区と一体になるには、時代が水位を高めた〈知〉に侵され過ぎていた。

高沢紀恵氏はパリ・リーグを王権と伝統的な街区共同体との対立という視点から考察する²⁴⁾。旧来の街区共同体は十六世紀を通じての王権との確執の許に再編成の途を強いられていた。レトワルもそこに属する王党派知識人達は、〈国王〉なる理念、〈国家〉なる理念の下で、〈もの〉と〈ひと〉との触知的な関係に基き宗教を支柱に成立する伝統的な共同体の理念と対立する姿勢を、社会的・文化的位置からも採らざるを得なかった。そのような知識人の間に勿論連帯感も存したろうが、レトワルが何度も軽蔑をこめて語る集合的な〈民衆〉に代表される、街区共同体の一体感とは異なる位相のものだった。

街区共同体の崩壊・抵抗・残存とそこからの疎外が成立してゆく時期にレトワルは都市生活を送った。パリの〈噂〉はレトワルにとって田園の細流のようなものであったかも知れない。だがその細流は、詩人達の〈自然〉の如く、共感を呼びかける対象等ではなかった。〈情報〉に流されず〈情報〉を集める点で、レトワルは〈情報〉を伝える共同体と距離を維持していたとも言える。街区という求心的・排他的な共同体に気を許さず、群集の熱狂を、冷めながらも追い求め、人工の建造物の集合である都市に美を覚えるレトワル——書物や〈情報〉に淫することが今少し少なければ、そして今少し〈知〉や〈理念〉を捨て、今少し民衆への感情が中性的であれば、レトワルはやがて来る都市生活者の、ひとつの典型と言えたかも知れなかった。

(1989年4月)

註

- 11) 〈噂〉の力学や機能に関する本稿での感想は概して、『日記』中の〈噂〉やそれに類似する現象の記述を基にした私達の妄想であるが、一冊だけ〈噂〉の理論書を掲げておく。ジャン＝ノエル・カプフェレ、『うわさ——もっとも古いメディア——』、古田幸男氏訳、法政大学出版局、1988年。カプフェレの考察は刺激的であるけれど、私達の時代を対象に彼の分析を応用する力量は私達には全くない。〈噂〉の紹介を

通じて僅かでも当時の人々の生活や心のざわめきを伝えられたら私達には充分なのだが、失敗の感が強い。

- 12) cf. 「*Histoire Universelle* (d'Aubigné)——十六世紀の歴史主義と党派性——」, 『駒沢大学外国語部研究紀要 第16号』所収, p. 286 et suiv.
- 13) Isabelle Armitage はその *Surnaturel ou Diablerie: Histoires prodigieuses mais véritables*, in *Essays in Early French Literature presented to Barbara M. Craig*, French Literature Publications Company, 1982, pp. 179-186. でレトワルが『日記』から除外した四篇の怪異譚に触れているが、レトワルはそれらの怪異譚の〈真性〉を証人の誠実な人柄や、或は証人が多数である点に求めているらしい。
- 14) 〈噂〉に対するレトワルの警戒心については幾度も述べて来たが、例外はあるにしても、レトワルは大衆の熱狂とか、或はその政治的利用であるプロパガンダとかにも応々心理的反撥を覚えていたようだ。ここではひとつひとつ引用しないけれども、この点に関しては Paul-F. Geisendorf, *Trois Chroniqueurs devant la propagande*, in *Aspects de la Propagande Religieuse*, études publiées par G. Berthoud et alii, Droz, 1957, pp. 403-408. が簡略にまとめる。
- 15) cf. Edme Champion, Introduction, in *Journal de L'Estoile*, éd. A. Brette, p. xxvii.
- 16) 『日記』には暗殺の直後、虐殺の開始どころか、フランス各地で互いにかばい合う旧教徒と新教徒の有様が言及されている。cf. [X. 253]. 十年後には反乱罪で死刑を宣告され亡命するはめになる Agrippa d'Aubigné がこの時、国王支持の演説をして新教徒達を説得した経過も『日記』から知られる貴重な逸話である。cf. [X. 303].
- 17) Schrenck はこの時期の『日記』に於ける《la quasi absence du 《je》 autobiographique》を指摘する (Jeu et Théorie du pamphlet, p. 72)。
- 18) 註1)で触れたように、1606年7月2日に始まるノートの、恐らく扉に(「恐らく」と言うのは私達が写本を見ていないからだ) モンテーニュを意識した、レトワル自身の記録への方法的反省を示す文章がある。今更言及する必要のない程、研究者によって引かれる文章であるけれど、晩年のレトワルの記録に関する思考や、『日記』に於ける〈私〉の位置の変化をこれ以上明確にする宣言は見当たらないので、敢えて全文を訳出する。

《「日記ノート [Registres-Journaux]」は昔からよく用いられ、私の様に、年をとった時、私達から苦勞を除き、私達の定めない記憶を軽んずるのに役立っている。

《モンテーニュ殿は、『エッセー』の中で、故父君が一冊を所持され、何事か注意に値するあらゆる事件や、その家の歴史の記録を日々、掲載されていたと言う。

《私のものはそれ程には正確でない。個人の事柄については、私の机や書齋の骨董

品 [curiosités] の範囲を殆ど越えて広がってはいないからだ。但し、公けの事柄については、もっと遠く迄行く。そして私は我ながら愚かにも日記をつけたものだと思っている。丁度、反対に、モンテーニュが父君の日記帳を続けなかった点で愚かだったと言ひ、思いしている如く（第1巻第34章）[M. de Montaigne, *Essais*, éd. P. Michel, Gallimard, 1965, t. I. では第35章]

（改頁）

《このノートの中で（私はそれを我が「骨董品屋」と呼ぶのだが）、（モンテーニュ殿が『エッセー』中で、自らを話し言っているように）素裸であるがままの私、日々の私の性向、自由で全く私自身のものであり、自分の流儀で振舞うのに慣れ、けれども邪までもなく悪意も持たず、（私自身困っているのだが）空しい好奇心と自由とに過度に傾く私の魂を人は見出すであろう。併し私からそうした魂を切り離そうとする者は、私の健康と生命を損なうのであり、それは、性質からしても経験 [art] からしても極めて自由な私は、強制された処では何の役にも立たないからだ。私が友人や知人にゆいつ願うのは、私の裡のこうした無益で取るに足らぬ活動、私の病と年令が私に強いるこうした楽しみを許し我慢してくれることである。私の年令に対し（もっと大きな災いを避けるために）、私が段々に戻って行くのを自覚する子供時代に対するかのように、玩具と娯楽とを提供するのだ。今日私が努力している全てとは（達成することが出来ないのではあるが）、（私にかくも多くの善いことを為された）神の御前で、外見を通じてしか判断しない、この世の人々の裁きを大して気に懸けずに、（暗く隠された）私の人生についての話を認めて頂くことである。と言うのも亦、見掛けによってのみ立派な者は殆ど価値が無く、この点で私の保証人 [vade mecum] モンテーニュ殿と一致するのであるけれども、健康と生命（私はそれに神の栄光と畏怖を加えよう）を除外すれば、そのために自分の利益を削ったり、精神の苦痛や強制という代価を支払い度いと思うものは何もないからである。私は使徒聖パウロの次の言葉を生活信条とする、即ち、私達ノ誇リハ、私達ノ良心ノ証シ [Gloria nostra, testimonium conscientiae nostrae [「コリント人への第二の手紙」, 第1章12節]]》 [VIII. 225-226]

- 19) 『日記』を余り評価したがない Pierre Villey もこの点は認めるようだ。cf. *Montaigne devant la postérité*, Boivin, 1935, pp. 183-184.
- 20) レトワルの、年令の進行と好みの変化の関係の自覚を伝える次の文章を参照。《ce que je n'ai point trouvé, soit que je me commence fort à saouler depuis peu de telles vanités et folies, desquelles la monstre m'est aujourd'hui autant ennuyeuse, comme elle m'a esté autresfois plaisante et agréable, soit que le meilleur de ce qu'il a et le plus singulier nous ait esté caché (comme il se peult bien faire).》 [IX. 337]
- 21) レトワルは敬愛する師モンテーニュと同様、メランコリーに苦しんでいた。『日記』

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

にも幾度もその様子が描かれるが、例えば次の一節を参照。《Pendant le séjour qu'elle fist ici, je fus tousjours malade, affligé et détenu au lit et à la chambre, d'une fièvre tierce assez rude et fascheuse, accompagnée de mon mal mélancolique ordinaire, pire que toutes les fièvres du monde, et qui est un fléol de Dieu pour mes pecchés (dont je suis bien digne, et d'un plus grand, que je porte depuis sept ans en ça, et lequel me fait vivre une vie mourante et langoureuse).》 [IX. 272]

- 22) cf. George Huppert, *Bourgeois et Gentilshommes*, traduit de l'américain par P. Braudel et A. Bonnet, Flammarion, 1983, p. 270 et suiv.
- 23) 《On a vu L'Estoile ne donner aucun signe de sensibilité en parlant de la mort de l'aîné de ses fils; il ne se montre pas becaucoup plus sensible pour sa femme et pour ses autres enfans. Il est moins occupé d'eux que de ses livres et de ses *curiosités*》 (Notice sur Pierre de L'Estoile, in Collection Petitot, t. 45, p. 14)
- 24) cf. 高沢紀恵氏, 「フランス宗教戦争期のパリ十六区総代会——八八一八九年体制を中心に——」, 『史学雑誌 96編10号』所収。

補 遺

以下は本稿への付属を念頭に置き乍ら、紙数の関係で一時は発表延期を考えた「〈噂〉表」である。その後事情が許し、幸いにも〈補遺〉として本文と併せて掲載することが可能となった。従って〈噂〉の範囲も名詞《bruit》により導入されたものに限られ、レトワルの『日記』に出現する数多の〈噂〉の一部に過ぎず、単独で〈資料〉の名を与えて提出する価値を殆ど有さないとも想えたが、稿本体の僅かな支えになるかも知れず、亦、《bruit》が〈噂〉を巡る表現の中では多分最も多用されるものである事態を考え併せると、将来のレトワル研究、或はパリ市研究の礎の、小石のひとつ程度にはなる場合もあろうかと、敢えて頁を借りることにした。

底本は無論稿本体と同じである。この表には《bruit》で導入される概ね全ての〈噂〉の内容が要約紹介されている。「概ね」と言う意味は、同じ項目中で同一の内容を指す「噂」なる語が繰り返して用いられても——例えば《一と言う噂が起こった。この噂は一。この噂は一。》等——それらをひとつとして

しか扱わなかった為であり、亦、この語（或は内容）を抽出する対象をレトワル自身の文章に限った為でもある。つまり『日記』に援用された文章で「噂」なる語が使われ、〈噂〉が話柄となってもこれは除外した。レトワルの文章であればパンフレへの註釈をも対象とした。稿本体の註1)で述べた疑念に基き、『日記』の補遺からは採らなかった。繰り返すが、動詞《bruire》等で導かれる〈噂〉も省いてある（《Il était bruit》は一応名詞表現と見做した）。

《bruit》が「物音」を指す場合は勿論考慮しないが、明らかに「騒ぎ」や「評判」と訳した方が良さそうな時もこれを除いた。更に《à petit bruit》の如く〈噂〉（〈騒ぎ〉と考えるも宜いが）の空白を示す場合も採り上げなかった。即ち私達の表で扱われるのは積極的で、かなり明確な〈噂〉である。

〈噂〉表の各欄は1)『日記』の、底本に応じた巻と頁の指示、2)その項目の時代（年度に関しては上二桁を略す。適宜15(00)、或は16(00)を補って頂き度い）、3)〈噂〉の発生した、もしくは伝達された場所（P.=Paris; C.=Cour; prt.=partout）（但し場所の限定は、《bruit》の語に位置的に近く、亦明確であるものだけを選んだ。例えば《bruit à Paris》等）、4)《bruit》の語に近く、品質形容詞等が修飾する時、これを書き出す（com.=commun.

（ ）内の形容詞は限定が間接的であること、キは否定を表わす）、5)〈噂〉の内容、を表わす。〈噂〉の内容については、一方では要約的であるが、他方関連する人物等には言葉を拡大することもある。（ ）でくくった文章は、《bruit》から直接導かれたり、それを限定したりするのではなく、前後の状況からかなり幅広く〈噂〉の内容を指すと想定される事柄である。更にこれらの〈噂〉の内容は必ずしも積極的に『日記』の項目を構成する訳ではない。一例として[IX. 140]では、香水商が金持であるとの〈噂〉が『日記』の議論の中心であるのではなく、金持だと言う〈噂〉のある香水商がレトワルの書齋を訪れたことが語られるのである。内容に関しては一応文章の形にしてはあるが、言う迄もなく〈事実〉や〈史実〉と対応があるか無いかは問われる可きでなく、それぞれ「との噂」とか「と言う噂」を補った方がその点明瞭になるかも知れない。

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

巻-頁	年-月	場 所	形 容	内 容
1- 5	74- 6			シャルル九世の死後、カトリーヌ・ド・メディシスがルーヴル宮の入口を壁で塞いだのは、陰謀を怖れてのことである。
6	6	P.	faux	新教武人ラ・ヌーが新教を棄て、新王アンリ三世に恭順した。
8	6		tout com.	前王の衣裳部屋係シャルル・ド・ゴンディが、兄弟のレッシ伯にその地位を奪われ、鬱ぎの虫にとりつかれ死んだ。
32	11	P.		コンデ公率いる新教軍がパリ周域を攻撃する。
37	12		com.	ブイヨン公の死は毒殺。
38	12	P.		國務卿のピナールが市長や市官吏から大金を巻き上げるべくパリを訪れた。
42	12	C.		シャルル・ド・ロレーヌの死について。
51	75- 2		com.	アンリ三世の結婚に際し、カトリーヌの最も願ったのは子宝である。
53	3	P.	faux	新教傭兵軍の設立。
54	3	C.		王が食事をする金も持たず、借金にたよって生きている。
58	5	P.		パリのサント・シャペル寺院の本物の十字架が、大貴族、就中カトリーヌの陰謀により盗まれた。
59	5			ノアーユなる貴族がコンデ公妃と相思相愛の仲である。
68	7			ある家具商の家で大量の武器が発見された。
88	9	P.	grand	新たなワイン税について。
91	10			ギーズ公がドイツ傭兵軍(=新教側)に大勝した。
95	12	P.		休戦協定にも不拘、コンデ公等の新教傭兵軍がライン河を渡った。
114	76- 2	P.		宮廷を脱走したナヴァール王アンリが、ロワール河を渡ってようやく安堵の吐息をついた。
115	2	C., P.		アンリ・ド・ナヴァールの脱走(実際の逃亡の二日前に流れた噂)。
120	2	P.	grand	パリの上流階層を中傷する諷刺文の犯人

高 橋

126	4			について。
134	6			コンデ公の進軍について。
150	8	P.		スペイン王、教皇及び何人かのフランス
150	8			貴族間での、新教軍及び親新教派軍に対
				抗するリーグ結成。
160	11	(新教軍内)		ナヴァール王が妹をコンデ公の嫁にする。
160	11			マイエンヌ公が結婚にあたり、妻の持参
				金を王に貸し、代りに聖職者財産売却金
				を手に入れる約束を得た。
166	77- 1			武装について。
175	1	C.		王と王弟の会見に並行し、オーストリア
				のドン・ファンが密かにパリを訪れ、ス
				페인大使と会い、更にリュクセンブル
				クでギーズ公と会った。
180	2			戦争について。
204	9			モンパンシエ公が、ナヴァール王妹と、
219	10		faux	王弟との結婚話のために、ナヴァール王
223	11		com.	に会いに行った。
233	78- 2	C.		義父の死がなければ、王はカーニヴァル
255	5	C.		に大金を浪費しただろう。
260	7			議会の延長を命ずる勅令が、その延長期
263	8		tout com.	間内に和平の準備をするために発布され
270	9			た。
298	79- 1			子供に恵まれないので、王が王妃に暇を
				出す。
				イタリア人達が、大法官ビラーグの愛顧
				を金で買っていた。
				王のミニョン、サン＝リュックの新婦は
				ひどく醜い。
				ギーズ公が近衛隊長アントラゲを、殺す
				と脅した。
				ミニョンのサン＝メグランがギーズ公の
				妻と関係している。
				ナヴァール王妃マルグリットが夫の許に
				向かってパリを去ったのは心ならずも、
				である。
				議会参事官ラ・ガルドが病気になり、ジ
				ャック・ド・トゥーにその地位を残した。
				聖ミカエル騎士団を王が創設したのは、

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

314	5	tout le pays	com.	王とミニョンの愛を隠すためである。 ある貴族の妻が浮気をしている。	
318	7		com.	王と教皇が了解の許に、フランス聖職者から金を集めようとしている。	
323	8		com.	初めはビュシー・ダンボワーズを可愛がっていた王弟が、やがて憎み始め、彼を殺すのに同意した。	
332	9	ville (=P.)	faux	新教軍がフォンタラビーの町を占拠した。	
353	80- 2		faux	ミニョンのサン=リュックが王の不興をかったのは計略による。	
359	5		com.	レス元帥の近親ゴンディが大金を残して死んだ。	
373	11			フランシスコ派教会の火事は新教徒による放火である。	
II- 11	81- 6	prt. prt. ce royaume prt.	à dessein	宮廷とパリでは王弟の結婚が決定済と考えられている。	
23	9			ミニョンのジョワイユーズ公の婚礼に王が費した金額について。	
75	82- 8			王弟等の暗殺を企てた男が、カレーやダンケルクの町をパルム公やスペインに引き渡そうと計画していた。	
76	8			スペイン侵略に抵抗するポルトガル王位継承者を支援する、ストロッジ率いるフランス軍が敗北した。	
131	83- 8			ナヴァール王妃がパリの宮廷に来てから浮気をし、子供を作った。	
154	84- 5			王がナヴァール王の許にデペルノン公を派遣するにあたり、彼の結婚も目的に含まれ、大金を与えたのである。	
168	9			ある財務官が免職処分となり、逃亡して名前を変えた。	
184	85- 3			ギーズ公やマイエヌ公がフランスや外国の兵や兵器を集めている。	
191	4			新教皇シクストゥス五世は、己れに逆った貴族を処刑した。	
204	7			新教徒との戦争について。	
205	7			com.	王太后カトリーヌが、ナヴァール王から王位権を奪うために、ギーズ公等の対ナ

高 橋

216	11			ヴァール王の行動を支援する。 ブルゴーニュのオーソヌの町の住民が、その地のリーグ派貴族を囚え、スペインに町を売り渡そうとした咎で裁いたのは背後で王が動いた所以である。
322	86- 1	P., people		王が病気である。
345	7		tout com.	法廷代訴人のストライキを王が許したのは、フランス各地で同様の事態が生じているためである。
362	12		tout com.	ギーズ公がセダンを攻囲するふりをしてロクロワの町を不意打ちした。
Ⅲ- 37	87- 3	P.		リーグ派によるパリ攻撃計画について。
38	3	P.		リーグ派のパリ攻撃について。
39	4			ミサを終え外に出た王が、珠数を指し、これがリーグ派用の鞭だと言った（王の信心が外見だとの謂）。
45	5	peuple	sourd	王が市当局に金を要求するのはミニョンに与えるためである。
56	7		com.	フィヤン会修道士は聖く、厳しく生活している。
58	7		com.	デペルノン公の代官がリーグ派の兵に殺されかけたが、それはその代官の敵、ドーマル公の指示によるものだ。
60	8		tout com.	デペルノン公の結婚を祝い、王が彼に大金を与えた。
66	9			モンパンシエ夫人が、ギーズ公等を称え旗を作らせていることを自慢する。
81	12	主として P.	grand	ナヴァール王の死亡。
81	12			ラ・ギシュ伯夫人とナヴァール王が関係をもっている。
111				アヴリヨ及びヴィヴィアン両夫人は神と親しく話をする ¹⁾ 。
130	88- 3		com.	コンデ公の後妻ラ・トレムイユ夫人の示唆により、コンデ公が殺された。
166	6			和平について。
191	10		com.	請願書審理官シャルドンが、詐欺の訴訟を免れた原因のひとつは、ヌヴェール公の愛顧による。

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

196	12	C.	sourdement	王によるギーズ公暗殺計画は、「聖トマスの日」を実行予定日としていた。
198	12		com., faux	暗殺を予感してギーズ公は気分を悪くした。
234	89- 1	C.		突然の病に倒れたナヴァール王が死亡した。
634	6	P.		ナヴァール軍がエタンブに進軍、パリに接近する ²⁾ 。
298	7	P.	faux	マイエヌ公が宿にしていたゴンディの屋敷で、公を暗殺せんとした待伏があった。
299	7	P.	par artifice	若きギーズ公が、ブロワの悲劇以来幽閉されていた牢を脱出した。
V-248	89- 9			アンリ四世がノルマンディに追いつめられ、英国カラ・ロシェルに逃亡せねばならない状態である ³⁾ 。
28	90- 6	tout P.	com.	代訴人ルニャールは、陰謀の咎で逮捕されて以来、法廷に呼ばれる迄五日間、食事を摂らなかった。
48	8	P.		和平について。
57	10	P.	faux	テオドール・ド・ベーズの死亡。
74	91- 2	P.	faux	新王アンリ四世が、シャルトル攻囲を解き、負傷した。
75	2			アンリ四世はシャルトルを諦めたのでも負傷したのでもなく、病に倒れ牢(chartre)にいる。
82	4	P.	faux	アンリに攻囲されているシャルトルにリーグ派援軍が入城した。
87	4		mauvais	(ポリティック派に敵対的な噂)
88	4	tout P.		シャルトルに援軍が出発する。
91	4			リーグ派大法官ルノクールが印璽を持ちパリを去り、サン=ドゥニにいる王の許に届けに行った ⁴⁾ 。
93	4	prt.		サン=バルテルミ教会の祭壇をつつむ布に十字架が現われ、それが様々な場所に出現した。
95	5	P.	grand	スペイン王の死。
98	5	P.	faux	デペルノン公が負傷、死亡す。
103	6	P.	faux, à dessein	王党派であったヌヴェール公等が、教皇の破門を恐れ、王の許を去った。

高橋

111	8	P.		リーグ派を裏切ったとして逮捕されたブリガールは処刑されないであろう。
134	11		mauvais	(ポリティック派相手の第二の聖バルテルミーの虐殺の噂)
149		C.		シャティヨン公の死が、アンリ四世の失寵を無念に覚えていることだ。
162	92- 3			モンパンシエ夫人が、彼女の財産差押え解除を許可された。
162	3			和平工作について。
162	3	P., prt.		和平が為された。
165	4			和平。
167	4	P. 周辺		パルム公軍の敗北。
169	5	P.		戦争。マイエンヌ公とスペイン軍の勝利。
169	5	St.-Denis		国王軍の勝利。
175	7	toute la ville(=P.)		デペルノン公が溺死した。
178	8			国王を代理するゴンディ枢機卿とリザニ侯の、ローマでの和平交渉について。
178	9		com.	アンリ四世を暗殺すると言っていた熱狂的なリーグ派副司祭の死によって、リーグ派は失うところが大きい。
179	9	P.	com.	参事官ラ・ヴォーと同参事官ニコラの娘の結婚にあたり、ラ・ヴォーはつんば、ニコラは愚かである。
179	9			アンリがグルネに造っている砦について。
179	9			飢餓による攻囲について。
180	10	prt. P.		パリと外部との交通が同意され、近日中に発表される。
181	10	P.	faux	アンリ四世が捕えられた。
187	11	St.-Denis P. 周辺		パリではバリケードが築かれた。
194	12		com.	パルム公の死に関し、その主人フェリペ二世が彼を妬んだことが、最期を早めた。
197	12		faux	ポリティック派の人々の暗殺が企てられている。
206	93- 1	P.	faux	モンタルジの町が攻囲された。
206	1		faux	マイエンヌ公に追放されたリーグ派ビュシー＝ルクレールが、ローヌと共にパリに戻った。

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

211	1			王党派によるフランス国内での大動乱。
218	2	P.	faux	トルコがルーマニアに進攻, 教皇はヴェネチアとフィレンツェに援助を求めた。
222	3	P.		国王支配下の町ムランで囚われているリーグ派ドータンが, 宣告された車裂きの刑について上訴した。
227	3	P.	faux	アンジェの城の陥落。/ シャルトル駐屯部隊の兵の首を悪魔が折った。/ ゴンディ枢機卿がムランにいるのが認められた。/ アンリ四世がヴィルプルーを通りかかり, ニワトリを捕え, 卵と一緒に食べた。
228	3	P.	grand	パリ攻囲。
232	4	P.	faux	王党派貴族ヴィック及びドーの死亡。
239	4	prt.	grand	国王がカトリックに改宗しようとしている。
V- 1	93- 5	P.	faux	国王が聖体行列に参列した。
4	5			国王の死亡。
4	5	P.		サン=ドゥニでは新教徒の説教が禁止された。
6	5		général	アンリがカトリックに改宗する。
8	5			和平。
12	5			マイエヌ公が落馬し死亡。
12	5			和平。
19	5	prt.		国王がカトリックになると誓った。
20	6	P.	grand	和平について, 少なくとも休戦について。
21	6	prt.		これから行われるであろう和平と休戦について。
22	6	prt. P.		休戦が行われるであろう。
24	6	P.		交渉が決裂し, 休戦も和平もなく, 戦争となる。
24	6	P.		ドルーの町が国王軍により攻囲された。
26	6	par la ville(=P.)		休戦が決定された。
36	6	prt.		アンリ以外の者を国王に撰出することになろう。
37	6	P.		王冠はギーズ公やヌムール公に与えられる。
39	6	P.		反乱。
41	6	P.		反乱について。

高橋

49	7		com.	財政監督官ブノワ・ミロンは、職人の息子に生まれながら、死んだ時には大金を残した。
49	7			和平条約をパリで発布しようとしている。
51	7			国王を撰出しても、外国人が国王となることになるだろう。
56	7		faux	モンパンシエ公が死亡した。
57	7	P.	faux	ポリティック派の誰が囚人とされるか。
61	7	P.		休戦について、またアンリ四世の改宗の延期について。
72	7	St.-Denis, prt.		休戦以上のものが手に入るであろう。
86	8	P.	grand	アンリ四世とマイエンヌ公を同時に暗殺する計画。
90	9	P.		スコットランド王が家臣に殺された。
93	9			王党派に奪われたリヨン市を奪回すべく、マイエンヌ公が出発する。
93	10	prt.		マイエンヌ公のリヨン遠征。
94	10			アンリ四世とマイエンヌ公の同意の成立。
95	10	P.	faux	ルーアン市民がバリケードを築いた。
95	10	P.		休戦が破れた。
96	11	entre le peuple		和平はないが、四、五年の休戦はあるだろう。
96	11			(和平や休戦について教皇周辺がどう考えているか)
102	11	P.	faux	ウィーンがトルコ軍に占領された。
103	11			マイエンヌ公のリヨン遠征について。
106	11			マイエンヌ公は三日後にリヨンに出発する。
108	12	prt. P.		マイエンヌ公がリヨンに出発する。
109	12	P.		休戦が破れた。
115	12	P.		戦争について、また休戦が破れたことについて。
117	12		faux	マイエンヌ公の出発。／ギーズ公はパリにとどまる。／十六区総代会の再建。／ポリティック派追放令。／マイエンヌ公とアンリ四世の和解。／この和解に基き、モー知事ヴィトリがアンリにモーを渡した。

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

120	12	P.		デュ・ヴェール等ポリティック派のパリ追放と、十六区総代会再建について。／ドーブレー大佐(旧市長)はパリを去らない。
120	12	par la ville (=P.)		パリ知事ベランが法院議長ル・メートルの追放状を渡しに行った。
121	12	entre le peuple		アンリとの和解があり、マイエンス公は彼に会いに行った。
123	12	P.		十六区総代会再建。
123	12		mauvais	軍を駐屯させるのに、パリ市民の家を用いる。
125	12			リーグ派のドルレアンとラ・シャトルが国王アンリの味方である。
137	94- 1			(知事ベランが辞任した真相をめぐって)
139	1	prt.		ベランは、自分はスペイン人にはならず、フランス人であり続けると言って辞任した。
152	1			王がストゥネーを危険な場所にしたのは、彼が、アンリの前の、ガブリエル・DESTREの愛人の仲介役だったからである。
154	2			アンリに好意的な請願書に署名したポリティック派について。
158	2			教皇特使はランスに行く。
163	2	P.	grand	サン＝ティノサン墓地に幽霊が出現。
164	3			十六区総代会は集会を開いたが、1,200名が参加した。
174	3	P.		次の木曜に行われる聖体行列の時、ポリティック派全員を暗殺する。
175	3	P.	faux	フェリア公の命令で、和平に傾くヴァロン隊の隊長が処刑された。
177	3		mauvais	(翌日、即ち、虐殺予定の木曜に関するもの)
179	3	P.		バステューユを国王に開け渡そうとした。
179	3		faux	バステューユの襲撃。／聖ジュヌヴィエーヴの聖遺物容器が願をかなえる力を持つ。
214	5	P.	faux	リーグ派の町、ヴィトリール＝フランセがリーグ派に背き、アンリ四世に寝返っ

高橋

223	8	P.	faux	た。ギーズ公はその町で虜囚となった。大公エルネストがマイエヌ公を捕えた。(アンリ四世の暗殺未遂事件に関し、その黒幕と見做されるイエズス会に好意的な検事総長に、アンリが苦言を呈した。) シャステルによる国王暗殺未遂事件について。
248	12			
250	12			
VII- 9	95- 1	P.	faux	マイエヌ公が捕えられた。教皇がアンリの破門を解いた。修道士がパリを去り、地方で新教の聖職を果たしている。デペルノン公の死去。国王がフォンテーヌブローで祭典を行う。ある大工が国王に対し陰謀を企てた。ド・ヴィラル提督がスペイン軍との戦いで虜囚となった。ギーズ公の死について。ヌムール公は毒殺された。大法官シュヴェルニ伯が逮捕された。デペルノン公の死。オーストリア枢機卿アルベルトがラ・フェールの町を救援に行く。カレーをフランス軍がとり戻した。あるかつての市役人が病死した。ローマでアンリ四世のために尽力したトレド枢機卿の死は毒殺によるものだ。トゥールの襲撃。王の妹カトリーヌが、ドゥ=ポン公との結婚を機会に、旧教に改宗する。ベーズが死去し、死の直前に新教を棄てた。同様に、新教レピーヌ牧師も死の直前に棄教して死んだ。歴史家ジャン・ド・セールは旧教徒として死んだ。国王が幻影を見た。國務卿ヴィルロワの祖先は魚売りであった。新教徒に対し新たな聖バルテルミーの虐
9	1	prt.		
17	1			
18	2	P.	faux	
22	3	P.		
29	5		≠ grand	
32	7	par l'armée		
33	7	P.		
34	8		com.	
44	96- 1	P.	faux	
45	1	P.	faux	
56	4			
56	4	P.	(faux)	
69	8			
73	10		com.	
90	97- 3	P.	faux	
94	5			
109	12	P., prt. la France	(faux)	
109	12		faux	
117	98- 5		faux	
135	9	P.		
151	11		com.	
171	99- 1	P.		

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

172	1		faux	殺を行う。
178	3	prt.		新教に好意的な勅令(ナントの勅令)に
182	3			対抗し、モンパンシエ公、ジョワイユーズ公、デペルノン公が同盟を結成した。
200	12		com.	国王が愛人のガブリエルと結婚する。
226	00- 5			悪魔憑きのマルトの母親は魔術に通じて
254	12	P.		いる。
294	01- 5			死んだノートル・ダム教会参事サンガン
309	8			は良きリーグ派であった。
312	8			(デュ・プレシ=モルネがフォンテーヌ
322	11	C.		ブローの討論会でデュ・ペロンに敗れた
326	12			ことに関して)
326	12		≒grand	官房書記官ロメニーがジュネーヴで死ん
VII- 9	02- 1			だ。
14	2	P.	com.	スペイン軍がジュネーヴを襲撃する。
63	03- 2	P.	faux	(国王が突然ヴェルヌーユを出発、カレ
64	2			ーに行ったことに関して)
64	2			スペインとの戦争。
88	8	entre le		ロレーヌ公等を宮廷から追い払うために、
89	8	peuple		アンリはプロワに旅行するふりをしてい
				る。
				バビロニアでアンチ・クリストが誕生し、
				ユダヤ人がその後に従っている。
				キリスト教徒軍がトルコ軍に敗れた。
				アンリ四世とマリー・ド・メディシスの
				結婚を非難する書を書いたのは新教徒で
				ある。
				テオドール・ド・ベーズの死亡。
				王の妹カトリーヌが嫁ぎ先のロレーヌで
				死んだ。
				王子(後のルイ十三世)が親しい弁護士
				の詩を聞かされるが、殆ど理解していな
				い。
				請願書審理官ヴィエトが死んだ時、枕元
				に大金が残されていた。
				イギリス国王が反逆者により傷を負わさ
				れた。/フランス国王の暗殺計画がある。
				パリに来た王の妹が新教の説教をするの
				を王は望まず、禁止した。

高 橋

99	9			戦争主計官の死は毒殺である。
107	11	en Uni- versité		ピエール・シャロンが死んだ時、ボーヴェ司教が生き返らせた。
160	04- 6	P.	com.	オランダのモーリス伯が暗殺された。
182	05- 6	P.		(反フランス的な書物について)
185	6	P.	grand	(不思議を並べたてた年鑑について)
193	9			(フランスやヨーロッパ各地で最近生じた沢山の奇蹟について)
196	12		mauvais	(イエズス会が国王に対し良からぬ感情を抱いていること)
223	06- 6	P.		パリの町が翌晩崩壊する筈である。
237	8			レトワル(作者)の息子が事故で死んだ。
243	9			(ブルジュの旧大司教の死について)
254	11			教皇の検閲を批判する小冊子がよく出来ている。
275	07- 2	prt.		ある靴直しは神聖冒瀆を口にするのを仕事にしている。
280	3			『パウロ神父弁護』なる書はルーアンで印刷された。
280	3		com.	ネール侯夫人が24歳の若さで死んだのは医者者の無知ゆえである。
289	4	P.	faux	王妃マリーが男子を出産した。
289	4			国王の身体への攻撃があった。
K- 17	10		com.	モスクワ大公の死はイエズス会士達によりひきおこされた。
26	11			イエズス会が催した芝居の間に嵐が突発し、多くの演戯者は死に、悪魔が連れ去った。
38	12	prt.		ある財務官は善人で財産がない。
98	08- 6		com.	会計検査院議長ヴィエンスは死んだ時に大金を残した。
119	8			スペインで作られた新しい聖母像が熱病を治すことが出来る。
119	8			(ある小冊子について)
123	8		com.	現在のスペイン大使以上に狡猾で抜け目のない大使がフランスに来たことはない。
131	9			パリには珍しい書物(デュ・プレシ=モルネが捜している)がある。
134	9			魔術師達がモンフォールの傍に集まり

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

140	10			ミサを逆しまに行ったりした。
155	10			ある香水商は金持で安楽な生活を送る。 フランドル三部会を、スペイン王と和解 しないなら見捨てると、国王が法院議長 ジャンンに言わせて脅した。
173	11			ある妻が長い間夫を寝とられ男にしてい た。
174	11			スペイン大使と密談の咎で捕えられた英 国人が、スペインの秘密、殊にフランス =スペイン間の王族の縁談はフランドル 休戦を行うための口実であると、アンリ に語った。
181	12			(『マルタン年代記』について)
184	12	C., prt.	fort grand	ソメリーヌ伯とクーヴル侯の争いについ て。
189	12			重病の首席議長の後継に、美しい姪を王 の側に仕えさせているトゥルーズの法院 議長が有力である。
195	09- 1			ある男が、自称教皇の私生児の死に関す る諷刺詩を作った。
242	3			(異端に対する戦い等、イエズス会士を 筆頭とするパリの説教師が四旬節の間に 流したもの)
258	5	prt.		ジュネーヴで陰謀を企て処刑されたフラ ンス人貴族について。
269	5		com.	法院が首席検事の死を悲しんだ。
300	7			デュレ將軍が国家参事となり、ヴィエン ヌ未亡人と結婚する。
310	7		sourd	ロレーヌ家がシャルルマーニュの直系で あるとする系図が、パリで売られている。
312	7	P., prt.		対スペイン戦争について。
312	7			対スペイン戦争。／コンデ公とその妻が ヴァレリに引き籠ったのを、妻に想いを よせるアンリが不快に覚えた。
333	8	prt. P.	(faux)	バビロニアで生まれたアンチ・クリスト について。
333	8			シャラントンで、イギリス王の著した教 皇批判文書が売られている。
335	8	C.	com.	国王の第五の医者をして、彼はジャン＝シュ

高橋

337	8			ル=ロワールの地で採用した。 知人がレトワルに紹介したデュ・モンテ ィエは鉛筆画に卓れる。
392	8		com.	ある商人は、沢山の貧しい者の脂と養分 で金持となっている。
X- 5	9			ある民事代官はその職責を十分に果たし ていない。
13	9	prt. P.		ある弁護士があやうく殺されかけたが、 それは彼が犯人の妻と関係を持っていた からだ。
14	9			スペイン大使リカルドの死は毒殺である。 コンデ公に対する王の態度が悪く、「男 色野郎」とさえ呼ぶ。
31	9	C.	com.	マイエンヌ公の子息の死について。
59	10			大法官ブリュラールが王の不興をかった。
59	10			金持の老人が死んでも遺産が殆どなかつ たのは、若い妻が盗んだためである。
70	11	P.	com.	フォーブル・サン=ジェルマンで、首 を吊った男がいる。
110	10- 1			請願書審理官シュヴァリエが税務裁判所 議長の地位を買うことを国王が許可した のは、彼が王太子をその後継者にすると 約束したためである。
154	2			戦争について。
155	2	P.	grand	レトワルの婿である国王付書記官は、生 きている間は現世の事柄に才能を用いて いた。
161				ドイツやイタリア、その他の地で始めら れようとしている戦争。
191	3	P.		レトワルの息子が公会議で立派な演説を した。
201	4			ある強制結婚を裁いた判事のひとりが、 無知のみならず、邪まで且つ裏切り者で もある。
209	4			アンリ四世暗殺者ラヴァイヤックが馬車 で連行される。
239	5			法廷は拷問に屈せぬラヴァイヤックに自 白させるため、その肉親をアングレーム から連れて来る。
250	5	P., prt.		

アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉(後)

283	6		com.	国王暗殺に関連ありと疑われた男が牢獄で死んだのは絶望と悪魔のそそのかしゆえである。
284	6			この牢獄で死んだ男は偽金造りに関与していた。
302	6	C.	tout com.	マリー・ド・メディシスは、早合点をしてダンクル侯コンチーニに与えた知事職を本来の者に嫌々ながら返した。
324	7	C.	com.	反新教的・反国家的著作の作者をソワッソン伯がかばい、王太后マリーを前面に立たせた。
327	7	prt.		近々第二の聖バルテルミーの虐殺がある。
330	7			第二の聖バルテルミーの虐殺について。
333	7	P.	mauvais, faux	王太后が新教徒に対し、第二の聖バルテルミー事件を起こしたいと考えている。
339	7	P.	mauvais	(第二の聖バルテルミー事件について)
340	7	P.	mauvais	(第二の聖バルテルミー事件について)
340	7	P.	tumultueux	(第二の聖バルテルミー事件について)
343	7		mauvais, (faux)	(おそらく第二の聖バルテルミー事件について)
346	7			マイエンヌ公がイエズス会を叱りつけた。
360	7	C.	com.	デペルノン公が王から与えられた金額は決して不十分なものではなかった。
376	8			ヴェルダンが首席議長に任命されたため、その地位を望んでいたド・トゥーは自殺を決心した。
376	8	ville (= Rouen)	com.	ブイヨン公がパリで暗殺され、パリは騒乱状態である。
377	8	P.		コトン神父著の『カトリックの教え』について。
384	8		tout com.	アンリ四世の死後8月15日迄の間に兵器廠から大金が引き出された。
XI- 60				この年に死んだある人足はよく病気を治すことが出来た。
71	11- 1			ギーズ公や新教貴族までもが、ソワッソン伯の子息とモンパンシエ嬢の結婚に反対した ⁵⁾ 。
73	1			(反イエズス会のパンフレについて)
82	2		com.	法院議長の地位を王太后がオゾンブレに

高 橋

102	4		与えたのには、イエズス会の働きかけがあった。
106	4	faux	ディエップ知事シゴーニュの死。
111	5	com.	マルグリット・ド・ナヴァールの死亡。 悪魔が化けて、それをつけていると王を殺したくなる指環をある兵士に与えたのである。

註

- 1) パンフレへのレトワルの注。
- 2) Lefèvre 版による。
- 3) Brunet 版後置の異本文による。
- 4) ルノンクールに関し、Brunet 版の《table alphabétique》では同名の枢機卿と見、Lefèvre 版ではそれと異なるリーグ政権下の大法官と考える。私達は後者に従う。
- 5) Brunet 版の紹介するトロワ版の写本に基く。

〔訂正〕

私達の仕事にはいつも甚だしい誤解と誤読とが付きまとい、まとめた直後から後悔の念に苦しめられるのだが、それでも適当な訂正の機会が無いままに、誤りを御指摘戴いた方々は別にして、素知らぬ顔を決めこんで来た。ただ今回は極めて無謀な誤読を繰り返してしまったので、この様な欄を設け、お読み戴いた方々にお詫びを兼ねて、訂正することにした。

拙稿、「十六世紀フランス語に於ける constance とその派生語について」(『駒澤大學外国語部研究紀要 第17号』所収)の(引用—3)の Clément Marot の詩、《Ma Maistresse est de si haulte valeur》の読み方が全く間違っていた事を、中京大学教授伊藤進先生から御指摘戴いた。《Maistresse》とは Marguerite d'Angoulême を指し、私達が副題も確認せずに早呑み込みした様に、《恋愛詩》等ではなかった。良い気になって Droz の揚げ足を取りながら、情けない勉強の仕方を曝け出してしまった。伊藤先生にはこの原稿に限らず、その他様々な誤読や不明箇所について御教示戴いている。この場を

借りて改めて厚く御礼申し上げたい。

拙稿、「十六世紀フランス短話集に見られる他郷との接触について」(『駒澤大学外国語部研究紀要 第18号』所収)の補遺(1)で *Le Maçon* 訳 *Décameron* の各話に付属する要約を、《1545年の、短話集にむけてのある心的態度を反映しているのは確実と想われる》等と言いながら訳出してしまった。ところがその後、私達が当時参考が出来なかった Henri Hauvette の雑誌論文、*Les plus anciennes traductions françaises de Boccace* (初出 *Bulletin italien*, t. VII [1907]-t. IX [1909]) の再録を入手したところ (Henri Hauvette, *Etudes sur Boccace* (1894-1916), Torino, 1968, pp. 151-294), ここでも私達がとんでもない早合点をしていたことが判明した。Hauvette によればこれらの要約=モラリテは *Le Maçon* の手になるものではなく、1551年版の *Décameron* 以降に付せられたらしい (cf. *ibid.*, p. 243 et suiv., 特に p. 309)。この原稿にも様々な不明点や誤解箇所があり、諸先生方から色々な御指摘を頂いたが、余りにも繁雑になるので、ひとつひとつ挙げることは今回は省略する。ただ一点、法政大学教授白井泰隆先生のお名前を二度にわたり誤記したことを深くお詫び申し上げる次第である。